

Nāgārjuna に帰せられる *Aṣṭamahāsthānacaityastotra* について

津 田 明 雅

Nāgārjuna に帰せられる讃歌は多くあるが、大部分の讃歌に関しては不明な部分が多い。ここでは、これらのうち *Aṣṭamahāsthānacaityastotra* (P no.2024) と、これに類似した内容を持つ、同名異作の *Aṣṭamahāsthānacaityastotra* (P no.2025) と *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra* (P no.2026) について、その内容を検討してみたい。3 作品いずれにもサンスクリット、漢訳はなく、チベット訳のみ確認できる。

1. 本讃歌およびタイトルの caitya について

本讃歌 (P no.2024)¹⁾ は 8 つの caitya に対する讃歌で、それぞれがシャーキャムニブツダゆかりの地に関連付けられている。全 10 偈からなり、前 8 偈をもってブツダの生涯の時間的順序に沿い、それぞれの caitya が称えられる。残り 2 偈はブツダを称え福德を回向する付加的な偈頌である。漢訳に関しては『八大霊塔名号経』(大正 1685)²⁾ の散文中に 2 つの偈頌群があり、そのうち最初の偈頌群にこの讃歌の前 8 偈までが相当する。ただし、地名以外の情報は漢訳の相当部分よりチベット訳の方が豊富で、テキストが完全に一致しているとはいえない。偈頌の順序は一致する。以下に前 8 偈頌にみられる地名、主な内容を示す。

1. Kapilavastu, Lumbinī, 生誕
2. Magadha, Nairāṇjanā, 成道
3. Kāśī, Vārāṇasī, 初転法輪
4. Śrāvastī, Jetavana, 神通を示す
5. Sāṃkāśya, (Kanyākubja), 忉利天から降下
6. Rājagṛha, Veṇuvana, 声聞を化度
7. Vaiśālī, 寿命
8. Kuśinagara, 涅槃

これら 8 つはいわゆる「八大聖地」に当たる³⁾。杉本卓洲氏によれば caitya という語は、初期の仏教文献では仏陀の生涯にかかわる聖地を指す言葉として使われ、ブツダの遺骨を祀った塔である stūpa とは異なる意味を持つものであったが、

後のサンスクリット仏典や大乘經典になると両者は「仏塔」の意味で区別なく用いられるようになった、という⁴⁾。この讃歌の場合の *caitya* は、その内容からみてもブッダゆかりの地に関連付けられているため、そこに仏塔が建立されたかどうかはともかく、正確には仏塔ではなく「聖地」自体を指しており、*caitya* は当初の意味で用いられているといえよう。

一方で、「八大仏塔」と呼ばれるものも存在する。「八大仏塔」には「八大聖地」との直接的関係はない。つまり八大仏塔の建立地は八大聖地と完全には一致しないのである。八大仏塔とは、ブッダの遺骨を祀るものとして各地に建てられた8つの仏塔のことである⁵⁾。最初に仏塔が建てられた8つの地名(及びそれらの建立者)は、パーリの伝承によると以下のようなものである⁶⁾。(パーリ語表記)

1. Magadha, Ajātasattu 王
2. Vesālī, Licchavi 族
3. Kapilavatthu, Sakya 族
4. Allakappa, Buli 族
5. Rāmagāma, Koliya 族
6. Veṭṭhadipa, バラモンたち
7. Pāvā, Malla 族
8. Kuśinārā, Malla 族

ちなみに、これらのほかにも「瓶塔」と「炭塔」との2つが建てられたという。

これら八大聖地と八大仏塔が同時に出てくる文献に、戒日王作とされる『大靈塔梵讃』(大正1684, サンスクリットを漢字で音写したもの)⁷⁾がある。ここでは *caitya* の語が2つの異なる意味で用いられており、興味深い。

(第1偈) 誕生[の場所]と、最高で比類ない悟り[の樹(菩提樹)のある所]と、喜ばしい[転]法輪[の場所]と、三界[の者たち]に崇拝される最初の聖地(*caitya*)[と]、栄えある偉大な神通[を示した場所]と、ヒマラヤ山脈の中にあるこの場所(*sthāna*)[と]、[ブッダが諸]天中の天から降り立った[場所]と、諸仏が涅槃したところの[場所]に私は頭を下げて礼拝します。

(第5偈) 十力で力強い、遺骨を納めた(*dharma-garbhā*) 八つの[塔]と、瓶[塔]と名づけられる諸塔(*caitya*)と、同様に、炭[塔]と名づけられる諸[塔]と、他の、雪山(*Himālaya*)や銀山(*Rajatakūṭa*)に比する諸[塔]と、宝石で輝く諸塔(*stūpa*)と、地下に、地上に、山の頂に存在する諸[塔]と、至る所の、遺骨を納めた[塔]と、諸仏の像があるけれど、それらに、毎日繰り返し、頭[を下げ]て私は礼拝します。⁸⁾

まず第1偈には八大聖地に相当する記述があって、その中で *caitya* と *sthāna* が同義に用いられている。したがって、この場合の *caitya* は「聖地」を指すという

ことが分かる。一方、第5偈では八大仏塔及び瓶塔、炭塔などの記述があるが、そこには *caitya* と *stūpa* の両語があつて、この場合の *caitya* は「仏塔」を指している。つまり、同じ *caitya* でも前者は「場所、聖地」を表わし、後者は「遺骨や遺物を納めた塔、仏塔」を表わしていることが分かる。

こうしたことを考慮しても、八大聖地を扱った本讃歌において、*caitya* を「仏塔」ではなく「聖地」ととることに問題はないといえよう。またそれゆえ、本書のタイトル中の *-sthāna-caitya-* の部分は、「... の場所の仏塔 ...」(Genitive Tatpuruṣa) ではなく「... の場所である聖地 ...」(Kharmaḍhāraya) と解すべきであろう。

2. 類似の2讃歌について

本稿で扱う3讃歌は内容的に非常に共通点が多い。先の讃歌は八大聖地とそこでの出来事に関するものであったが、次の前者も八大聖地とそこでの出来事に関するもの、後者はブッダの生涯の行為に関するもので諸聖地との関連も深い。

Aṣṭamahāsthānacaityastotra (P no.2025)⁹⁾ は no.2024 と同タイトルであるがテキストは異なり、全8偈からなる。内容的にブッダの生涯をゆかりある地とあわせて述べるところは類似しているが、no.2024 のように偈頌ごとに地名が明示される訳ではなく、また時間的な順序も前後し、未整理の感は否めない。明示される地名は2.Kapilavastu と3.Vārāṇasī のみで、時間的順序も、1.降魔成道 [Buddhagayā], 2.生誕, 3.象を屈服 [Rājagṛha], 4.獼猴奉蜜 [Vaiśālī], 5.初転法輪 [Vārāṇasī], 神通を示す [Śrāvastī], 6.二龍灌水(生誕), 成道, 7.眷属をもつ [?], 8.天から降下 [Sāṃkāśya], 涅槃 [Kuśinagara], となっており ([] 内は筆者の想定する地名)、前後している。さらに1と6, 2と6, 3と5の各2偈では聖地の重複がみられ、3, 5, 6, 8の各偈ではそれぞれ2聖地が言及され、必ずしも1偈につき1聖地とはなっていない。これらの出来事はグプタ朝サールナートの八相彫刻とほぼ一致するが¹⁰⁾、この点は重要である。ちなみに第4偈の猿がハヌマーン (Hanumat) らしき名 (Halumaṇḍzu) であるのは、他文献にはみられない独自の記述である¹¹⁾。

Dvādaśakāra-nāma-nayastotra (P no.2026) は、形式的にはブッダの生涯における12の行為を称えた讃歌であり、全14偈中第2偈から第13偈で12の行為が称えられる。それらは2.受胎, 3.生誕, 4.5.成長, 6.出家, 7.苦行, 8.成道, 9.転法輪, 10.布教, 11.神通を示す, 12.涅槃, 13.滅後であり、地名がみられるのは3. Lumbinī, 4. Magadha, 7. Nairāñjanā, 8. Magadha, 9. Vārāṇasī, 11. Śrāvastī, 12. Kuśinagara である。実に、八大聖地のうち、Sāṃkāśya, Rājagṛha, Vaiśālī 以外の

5つの地名がみられる。また第13偈には「8つの場所に仏舎利塔が…」という記述がみられ、八大仏塔にも触れられている。

3. 著者について

これら3讃歌はいずれも Nāgārjuna 作とされるが、中観派の祖とされる Nāgārjuna の真作であるのかどうか、まず彼の諸著作との内容の比較を試みた。その際中心となるのは『中論』(MK)である。彼の真作と認められるものには、必ずといっていいほどこの MK にみられる思想が何らかの形ででてくる。しかしながら、3讃歌のいずれにも MK にみられるような哲学的思想はみられない。また逆に、3讃歌の内容が Nāgārjuna の諸作品にみられることもまれで、わずかに *Niraupamyastava* (Ns) 第23偈に、「… [ブツダが] 入胎し、生まれ、悟りを開き、[法] 輪 [を転じ]、涅槃 [した話を聞くこと] に喜びを見出す人々…」というブツダの生涯に関する記述があるにすぎない。今のところ Ns は真作と認められるので、あながちにこれら3讃歌の Nāgārjuna 作を否定することはできないが、決定的なものとはいえないだろう。また、真偽性で議論の残る『大智度論』にもブツダの生涯に関する記述があるが¹²⁾、3讃歌と共通する個所は少なく、同一の作者であると結論づけることはできない。結局、Nāgārjuna の諸著作との比較からは3讃歌とも真偽性を判断するのは難しいといえよう。

ちなみにno.2025の第8偈c句はプトゥン仏教史に引用がある¹³⁾。そこでは、ブツダ入滅の年齢に関する諸伝承が上げられているが、本讃歌の著者には触れられていない。

一方、八大聖地の観点からは、岡野潔氏らによればそれら8つが出揃うのはグプタ朝以後ということである¹⁴⁾。そうであれば、少なくとも八大聖地を扱うno.2024と2025に関してはNāgārjuna よりも後の成立であることになる。

また、Nāgārjuna の著作と認められるものの中で *Ratnāvalī* と『菩提資糧論』には、caitya の音写である「支提」という語が確認できる¹⁵⁾。これらはいずれも文脈より、明らかに「仏塔」を指しており、本讃歌のように「聖地」を指したものではない。これら2書および『十住毘婆沙論』では「仏塔の供養」を勧める記述は他にもいくつか確認される¹⁶⁾。静谷正雄氏が「紀元前後から三世紀頃までの南インドの碑銘を調べると、ヴィンドヤ以南の地方では仏塔をさすのにチャイトヤを用い」¹⁷⁾と述べることから、南インドに在住したともされる Nāgārjuna にとって、caitya とは「仏塔」を意味したのかもしれない点には注意が必要である。

4. まとめ

ここで扱った3讃歌はいずれもブッダの生涯の出来事を扱っており、非常に共通した内容をもつ。これらのうち no.2024 は八大聖地に関して最も体裁の整ったものである。同名異作の no.2025 は八大聖地を主題とはするが、時間的順序が前後したり地名の重複がみられたりと no.2024 ほど整ったものではない。no.2026 はブッダの生涯における重要な行為を主題としており、諸聖地や八大仏塔にも触れて前2讃歌とよく類似した内容をもつ。しかし作者に関しては、これら3讃歌には地名や出来事に関しては豊富な記述があるけれど思想的な記述がなく、特定することは困難である。3作品のいずれも Nāgārjuna 作とされるけれど、彼の著作と認められるものには仏伝に関する記述は1箇所確認されるのみで、そのほかには仏塔での供養に関する記述がいくつか確認されるに過ぎない。したがって、Nāgārjuna の諸著作との比較からは真偽性の判定は難しいといえる。一方で八大聖地の観点からは、8つが出揃うのはグプタ朝 (ca.320-550) 以後ということで、Nāgārjuna よりも後であることになる。この点から、八大聖地を扱う no.2024 と 2025 の真作の可能性は低いといわざるをえない。

1) Nakamura, H. (1980) “The *Aṣṭamahāsthānacaityastotra* and the Chinese and Tibetan versions of a text similar to it”, *Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte*, Louvain-la-Neuve, pp.259-265. 和訳: 中村元 (1980) 『ブッダの世界』, 学習研究社, p.465; 英訳: Bagchi, P.C. (1941) “The eight great caityas and their cult”, *The Indian Historical Quarterly*, 17-2, pp.228.26-229.27. 2) 英訳: *ibid.* pp.230.28-232.19. 3) 秋山光文氏によれば八大聖地の初出は義浄 (635-713) による記述で、そこでの8地名は本讃歌と順序は異なるけれど一致する: 秋山光文 (1999) 「インド仏伝美術における『獼猴奉蜜』図の成立と展開」, 『東洋美術史論叢』, 雄山閣出版, p.18.7; 大正 1451, p.399a15-17. そのほか大唐闍賓国三藏般若訳『大乘本生心地観経』(大正 159), pp.294a23-b6, 296a14-a19 にも言及される: 岡野潔 (1999) 「仏陀が永劫回帰する場所への信仰」, 『論集』, 26, p.84.21. そこでの8つは本讃歌と同様に、1.Kosala, 2.Magadha, Gayānagara, 3.Vārāṇasī, Mṛgadāva, 4.Śrāvastī, Jetavana, 5.Āndhra, Kanyākubja, 6.Magadha, Rājagṛha, Gṛdhṛakūṭa, 7.Vaiśālī, Āmrāpālīvana, 8.Kuśinagara, Ajitavati とされる。八大聖地は『大般涅槃経』などにみられる「四大聖地」から拡大されたものであるが、その過程について岡野氏は、次のように述べる。

「法顕(筆者注: 399年に60歳位)の時代には阿含の四大聖地(Lumbinī, Buddhagayā, Vārāṇasī, Kuśinagara)から「定」の四大聖地(Buddhagayā, Vārāṇasī, Sāmkāśya, Śrāvastī)へと巡礼の人氣が移っていた。「定」の四聖地に入らない誕生地と涅槃地を加えるなら、当時権威があった聖地は六つあったといえるが、インド仏教徒は四か四の倍数を好ん

だため、グプタ朝 (ca.320-550) 以後は、六大聖地ではなく八大聖地として、仏跡地の新しい枠づけがなされるに至った。この八大聖地観では、阿含の四大聖地に *Sāṃkāśya* と *Śrāvastī* との新興の二聖地を加えた六聖地を中核に置くことに大体異論はなく、さらに二つの聖地が好きなように選べるようになった。一般的にはその空いた二聖地には *Vaiśālī* と *Rājagṛha* を入れるのが好まれた。」(*ibid.*, pp.91.21-92.4) また八大聖地は八相図とも関連が深く、門川徹真氏らも「仏伝彫刻から見た八相図の起源と文献から見た八相の起源とはほぼ同時代のものと思われ、4世紀より以前には遡れない」(門川徹真ほか (1973)「八相彫刻と経典の関係」, 本誌, 22-1, p.78.22-23) とする。 4) 杉本卓洲 (1984)『インド仏塔の研究』, 平楽寺書店, pp.47-48. *caitya* と *stūpa* の両語は仏教文献以前にも存在し、時代によって意味が異なるなど複雑な変遷を経ている。杉本氏のもの以外に *caitya* と *stūpa* の語義を考察したものとして、Bureau, A. (1974) “Le Parinirvāṇa du Buddha et la naissance de la religion bouddhique”, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 61, pp.290.33- や野村耀昌 (1953)「*Caitya* の語義についての考」, 本誌, 1-2, pp.130-131 などがある。 5) 梶山雄一 (1976)『般若経』, 中央公論社, pp.38.7-40.10. また詳しくは、杉本卓洲 (1984) pp.318.6-329. 6) *ibid.* p.22.11-19. サンスクリット名での八大仏塔の建立地などは、Bureau, A. (1974) p.288.17, 21-24. 7) 榊亮三郎 (1913)「所謂戒日王御製の八大霊塔梵讃につきて」, 『榊亮三郎論集』, reprint 国書刊行会, 1980, pp.51-67. その他の還梵テキスト: Bagchi, P.C. (1941) pp.232.21-233.13; Lévi, S. (1895) “Une poésie inconnue du roi Harṣa Śīlāditya”, *Actes du Dixième Congrès International des Orientalistes, Session de Genève, 1894*, 2, pp.199.17-201.10; 和訳: 中村元 (1980) p.466. left23-right52. この讃歌の作者は 606-647 年在位の戒日王とされる。詳しくは: 山田龍城 (1959)『梵語仏典の諸文献』, 平楽寺書店, pp.79.10-80.15. 8) 榊亮三郎 (1913) pp.57.9-12, 63.8-11. 9) 英訳: Bagchi, P.C. (1941) pp.229.29-230.26. 10) 井ノ口泰淳ほか (1979)「初期仏教彫刻における仏伝図の展開」, 『仏教学研究』, 35, p.14.16-20; Williams, J. (1975) “Sārnāth Gupta steles of the Buddha's life”, *Ars Orientalis*, 10, plate 3. 11) Hanumat に関しては横地優子准教授より貴重なご教示を頂いた。記して感謝する。 12) 例えば、以下には生誕から成道までの様子が描かれる: 梶山雄一ほか (1989)『大乗仏典 中国・日本篇 1 大智度論』, 中央公論社, p.18.2-14. 13) Obermiller, E. (1932) *The History of Buddhism in India and Tibet by Bu-ston*, Bibliotheca Indo-Buddhica, 26, Heidelberg, reprint Delhi, 1986, p.70.8-10. 14) 注 3) を参照のこと。 15) 前者では大正 1656, pp.497b4, 498c2, c4, 500a5, a7, 504b12 (II-76, III-33, 34, 92, 93, V-65), 後者では大正 1660, pp.536c6, c8, 540a1, a6. 岡田行弘 (2000)「ナーガールジュナと仏塔崇拝」, 本誌, 48-2, pp.77-82 参照。 16) *ibid.* に詳しい。 17) 静谷正雄 (1974)『初期大乘仏教の成立過程』, 百華苑, p.206.14-15.

〈キーワード〉 Nāgārjuna, *Aṣṭamahāsthānacaityastotra*, 八大聖地, 八大仏塔, 八相図
(京都大学大学院修了, 博士 (文学))